

ミルトンとイタリア

植 木 敏 一

ミルトンの全著作のなかで、sonnets は全体としてみるときに、第一期と第三期の作品の橋渡しの役割を果すものとして位置づけてきたが、今なお私の意志にはなんら変化をきたしていない。ところで、ミルトンのイタリアの旅は同じように、人間として、偉大な詩人としてミルトンを育てあげるにあたって、前者の場合と同じように大なる影響を彼の心に与えているかを眺めてゆきたい。

旅は文学の創作において、想像と同じように詩人あるいは小説家として持たねばならぬ重要な要件の一つである。旅とは知識の源泉として現実にその土地とそこに住む人びとについて直接観察したり、自己の研究分野に深い関係のある人びとと接触し知己を得るということも意味するとすれば、ミルトンのイタリアの旅はどんなものであったであろうか。そもそも古典文学では、先人たる詩人とか小説家の思想の表現を借用するとか、同時代あるいは前時代の影響をうけるが、しかしその中で詩人の消化された独創性、つまりその詩人に相応しい詩人が発見されなければならない。ロマンティックの詩人たちについてもこのことがいえるのである。Harold Bloom¹⁾ は、すべての有力な詩人は意識的であろうが、潜在的意識的であろうが、偉大な先駆者たるべき詩人の作品を読みかつ思考するときには、畢竟心のなかでの詩作上の過程は過去の詩人および同時代の詩的遺産の強力な影響に対して心の中で葛藤が生じる。かくして先人の残した作品に対する鑑賞の誤りである方法を修正することによって自己の正当化をはかろうとする旺盛な精神が、その詩人なりの新しい詩がこの世に誕生するという詩論を与えている。この詩論については、ミルトンを研究している間にこのような理論は特に強く感じたので、すでに発行された論集のなかで触れておいたと思う。それは、ミルトンの詩は簡単にいえばこの理論のようにギリシャ・ラテン、イタリアの文学、イギリスの同年代の文学を学びとった上で、消化作用が活発に行われて、詩人の成長とともに偉大なる詩を創作したということである。

“The vales redoubled to the hills” (Sonnet XVIII, 9) と歌ったイタリアの地勢が丘また丘と起伏しているその国へ、またイギリスと比較すればその当時は遥かに立派なイタリアの都市へなぜ旅立ったのであろうか。もちろん、イギリスの詩人たちの、イタリアへの大きな憧憬の念のしからしめたためである。その讚美したイタリアの都市とは、

“But here I feel amends,

The breath of heav'n fresh-blowing, pure and sweet,

With day-spring born ; here leave me to respire” (S. A. 9—11)

“free Rome, where eloquence flourished” (P. L. IX. 671)

“the oratory of Greece and Rome. (P. R. IV. 360)

“Rome was to sway the world” (P. L. XI. 405)

“Rome, Queen of the Earth (R. R. IV. 45)

のように彼の心のなかに深く刻みつけられて消化された章句である。しかし、第二期散文

時代、即ちイタリアから帰ってから余り年数を経していない時期においては、古代の実名のみならず、滞在中出会った人びとの実名がたびたび現われることによっても、イタリアに対して、またイタリアの人びとに対する自己満足と誇示が想像され、また感じられるのである。このような文学的現象はミルトンの詩における独自性いや平凡性といってもいい過ぎでもないであろう。また、すぐ前の年代のシェイクスピアが劇の舞台として選ばれたこともいかにイギリス人の文学、芸術にたずさわっていた人たちの憧憬の地であり、その観客の嗜好に応えたものであったろう。

元来古い批評家たちはイタリアへの旅行と文学については大きな比重をかけなかったというけれども、ミルトンはイタリア旅行前においても Sonnet II, Sonnet III, Canzone, Sonnet IV, Sonnet VI を、いわゆるイタリア詩を原形として創作しているが、これら一群の詩は試作の域を出ていなかったものであったが、イタリアの旅（29才～30才）から帰ってから受けた影響の方が強かったのであろう。ミルトンが Holstenius に宛てた自筆の手紙（1639. 3. 8.）をみれば Joannes Miltonuis の署名が見えるが、これほどイタリアに傾倒した彼がイタリアへ行った動機については批評家たちは異った意見をわれわれに与えている。そもそも旅行なるものは自己の体験を象徴することについては各人とも異論はないであろう。しからば、イタリア人の目から見れば、異教徒であったミルトンがなぜカトリックの本山へ行ったのであろうか。Hanford²⁾ は彼の外国および特にイタリアへ旅行したことについては直接的な証拠はないといっているものの、宗教家・政治家・文学者・高位高官の人たちに会いたいということは、出発当時から彼の心に深くきめていたことである。しかし、当時詩人であったミルトンは若年であったから、彼の力をもってしては有名人に堂々と会見を求めることは国家権力に依存する以外には不可能であったであろう。これが後になっては国家権力とぶつかるという不思議な因縁となる。

イタリアの旅では彼の心のなかで、カトリックの殿堂とその宗教の墮落と、カトリックの勢力下にあった清教徒との関係をさかのぼって見たいという念願を抱いていたであろう。こういった情熱は後になって世に問うた “Christian Doctrine”（死後発見、1825年出版）となって世人が彼の宗教論に接したという大きな収穫を生んでいる。Einstein³⁾ は「イギリス人がイタリアへ行くのは研究するためではなく、イタリア文化——確かにイタリアではルネッサンスの伝統文化を続けていたのだが——に興味を抱いていた。」、また「建築物を文化の面から観るためだった。」と述べているが、ミルトンは他のイギリス人たちの気持だけにはとどまらなかった。ミルトンにはまだ見るべき眼があった。なおかつ聞くべき鋭敏な耳があった。この意味で学者・文士・宗教家に出会うために最善の努力を続けた。「ローマ文化はギリシャ文化をわがものにしようとして、多くの点でその模倣をめざしているのである。また模倣がすでにローマ文化のなかで重大な役割を演じたことは疑いの余地がない。」⁴⁾ と S. ドレスデンはいつているが、また最近注目を集めている Bloom⁵⁾ の詩論のなかでも「詩人が偉大であればあるほど、想像的空間を明確にするために互に読み間違いを犯しながら詩的影響を区別することが出来ない。」ということを知るが、模倣をすることは詩人たちの行う常套手段であることは歴史の示すところである。ミルトンも例にもれず、ギリシャ・ローマの伝統と彼の同時代の先人たちの伝統とを継承している。しかし、1639年8月 First Bishop's War のためギリシャへの旅を断念し急遽帰国しなければならなかったため結局彼の最初の希望は失敗に帰したのであった。そういう訳でイギリスからパリを経てイタリアまで辛苦を味いながら辿りついたが、彼の心を一番魅惑したイタ

リアの諸都市における滞在が大部分を占めることになったのである。心理的に探究すれば、イタリア語とか、イギリスに比較すれば大きな進歩していた文学をイタリアにおいて自分のものにするためには、ルネッサンスの伝統を保持している美の国イタリアにおいて出来るだけ長く滞在したかったであろうと想像されるが、血気の多い彼が宗教への情熱と、彼にとっては愛国心がそれを許さなかったのである。ここにミルトンの第二期つまり散文の時代の端緒をみるのである。また、Aeropagitica (1644) の執筆もこのイタリア旅行での見聞の結果であって、イタリアの学者に対して出版の自由——ミルトンの思想の一環をなすものだが——に制限いや強圧が加えられているのを直視したためであった。

彼が学者、文化人、宗教人はては音楽家にまで会ったことを述べたが、それらのうちでミルトンが科学と直接に接触したのは Galelio である。異教徒であるミルトンが幽閉中のガリレイに会えたかどうか疑問視する批評家がいるが、文献から思惟すれば短時間ではあったが会えたということがいえるのではないかと思う。もし、ガリレイに近ずき得たとすれば、どのような方法をとったかは明確ではない。そもそも、ガリレイ (1564—1642) とベーコン (1561—1626) は17世紀においてイギリス人たちの注目の人物であり、ガリレイはアリストテレスの自然観を修正して近代力学の基礎をおき、1609年望遠鏡を改良し——もともとはオランダで始めて発明されたものだが——木星を発見しコペルニクスの地動説に科学的証明を与えた。例えば月の山、銀河の存在とその本質と1613年には月面の点についても言及したこのような宇宙論は教会にとって神学の根本問題にも触れる反逆的ともいおうか極めて重大問題であり、コペルニクスの地動説を基盤とする宇宙説による宇宙論の解明は堅く禁止されていたにもかかわらず彼の言辭は枉げず遂に幽閉を命ぜられた、その時には両眼失明という悲運のうちに死去の運命に逆らうことはできなかった。ガリレイとは異なり、他方ミルトンはあのような幽閉こそされなかったが、家庭内における孤立化 (晩年になってはそうではなかったが)、失明、死など共通の点もなくはなかった。

もう一つは、ミルトンが出会った一人の侯爵 Giovanni Battista Manso (1560—1645) は絵画および文学のパトロンとして財産を注ぎこんだ高貴な紳士に対してミルトンはすでに詩を献げていたが、はからずも隠遁僧に紹介をしてもらった。ミルトン⁸⁾ の言葉によれば “a nobleman of distinguished rank and authority” であった。ミルトンとマンソーとの関係は宗教、哲学、芸術の面において眺めなければならない。

つづいて音楽の影響だが、イギリスとイタリアとを比較すれば、イタリアが声楽の方面では遥かに大きな業績をすでに残していたが、一方イギリスでは器楽器がその主位を占めていた。賢明なるミルトンはガリレイに接するに及んで音楽理論の暗示を得たことは、Spaeth⁹⁾ が示唆を与えたことであるが、Florence から Rome へ行き宮殿音楽に耳を傾け芸術の可能性を把握したことは、ミルトンの生来の文学的天才のしからしめるところであろう。音楽との直接的な接触はミルトンの詩的想像を揺ぶったことになり、音楽家の喉を通り過ぎる朗々たる音声は恰も神そのもののお声とも感じ、そのうえにこの音楽と劇がミルトンの将来大いなる大作を産む基盤となったが、Masson¹⁰⁾ はミルトンがイタリアの音楽、劇場に近ずかなかったことには触れていないが、後になって再評価にはこの問題の重要性がとりあげられている。というのはこの音楽と詩形、詩語の選択、詩の構想に大きな影響を与えているからである。

彼の音楽的嗜好から出て、無韻詩を用いることは脚韻より容易で使用効果があり、彼の精神の自由性から判断すれば、彼の性格に適したことから学びとったものであろう。また

Samuel Johnson¹¹⁾も次の通り云っている。

“Milton more probably took his hint from Trisino’s *Italia Liberata* ; fling blank verse easier than rhyme, was desirous of persuading himself that it is better.”

また、ギリシアの詩語法に歴史的にはギリシアの流れとして ‘syaloepha’ (例えば, th’ omnipotent) を使用することを我々に示している¹²⁾。

また、イタリア旅行前、1637年に100行の小篇 *Lycidas* を書いたが、この詩のなかで、‘rhetoric of rhyme’ と韻文の齟齬とを結合させ一つの明確な詩型を我々に示したことは、一つの詩の中道を歩いていたことを知らさせる¹³⁾。

Sonnets が第一期と第三期との詩的想像力の橋渡しをすることは他の論文で述べたが、このイタリアへの旅は、対人的、対物的体験を通しての第三期大作にそなえた準備時代と考えてもいいのではなかろうか。しかし、ミルトンは主として散文を駆使し自分の思想と主張、将来自分が詩作する構想を熟思する時代でもあり、それにひき続いて真実な自己を散文のなかに姿を現わした時代でもあった。従って自己のみならず、他人もこの一連の散文には実名を明示して、自己の進むべき道に光明を投げようとしている。換言すれば、イタリア旅行前に書いた *Lycidas* (1637) は闘争の結果としては、*Comus* よりももっと力強い詩となって現われているが、その力強さは、ミルトンの心の力強さの流出でもある。その最後の

“And now was dropped into the western bay ;

At last he rose, and twitched his mantle blue :

To-morrow to fresh woods, and pastures new.”

という実に力強い結びは、イタリアの *canzone* の形式的な要素を具現しているが、この詩のなかでの気迫は1638—39年のイタリア旅行には相応しいものではないか。

The Second Defence (1654) によれば、ミルトンは12才頃から猛烈な勉強に従事し、生れながら視力が弱かったために勉強が拍車をかけて漸進的に視力が弱まり74才で全盲になってしまったという悲しい運命を辿らなければならなかった。父が教育熱心で、ミルトンをして家庭教師に指導を依頼し諸外国語を学ばせた。そのために哲学にも相当通じることができたという。諸外国語というのは、ギリシャ語、ラテン語、イタリア語を指しているのだろう。この結果、哲学とは何か。哲学はいかにして読まねばならぬかということを知り得たのであろう。M. A. をとって後にすぐイタリアへ逃亡せず父の家に隠遁したと述べているが、その理由として彼の性格から判断すれば、学校で友情と尊敬を得られなかったということが確かであろう。この時よりイタリアの旅への心が動いていたが、それが一時的に中止せざるを得なかった。イタリアから帰国後 2, 3 年を経て、書いた *Sonnet IX* (1642—5) において、話しかけられた若い女性は誰であったか今日まで明らかでないが、彼は彼女の家族および彼女とは友人の仲であったが、彼女は堅ぐるしい女性であり、ミルトンはこの女性に宗教的安心を与えているのだが、この十四行詩のなかでミルトンのこの時代の「自分」の echo があらわれていることは疑いないことであろう。しかし、イタリアでは全くそのような人間ミルトンが見られなかった。父の家で自由気儘な日々を送っていたが、その間にギリシア・ラテンの古典を読み耽けったり、時々ロンドンへ行っては書籍を買いもとめたり、数学や音楽の新しいものを学んだりすることが彼の心を紛らす唯一の楽しみであった。このようにして父の家に同居していた頃、不幸にも母の死にあい、外国旅行、特にイタリアへ行かねばならぬという衝動に駆られた。父の側にも息子に対する

親心が動いていたかもしれないが、幸いに父の快諾を得られて、家僕一人を伴ってイギリスを出発したのである。駐イ Henry Wotton イギリス大使から自筆の紹介状を貰ったのである。この紹介状を受取ったときの彼の感動はいかばかりであったろう。彼にとってはこの紹介状こそ、

“breathing not only the warmest friendship, but containing some maxims of conduct which I found very useful in my travels”

と書いている通り、彼は欣然たる心情を胸深く抱いたことであろう。この友情こそは、究極的には“Go therefore, half this day as friend with friend” (P. L. V. 229) と云った神と人間との友情へと発展していくのである。また Thomas Scudamore からも紹介状を得ている。この紳士も王党に属し、一国を代表する大使であるが、こういった人たちの紹介状を得たというよりも最大限に利用したといった方が当を得ているのではなからうか。このように多くの友人たちというのは、貴族、高位高官、社交界に出入りし得る紳士たちに近ずいていったと云い得るのではなからうか。ここに彼は庶民を相手にせず貴族、高位高官、文化人に依存する旅行、いわゆる世に云う貴族性の傾向が認められるのである。パリ¹⁴⁾には僅か数日しか滞在せずして、陸路をとってイタリアへ向けて旅を続けたのである。この旅は当時としては馬、馬車、駕籠、船を利用したらしく、それでも相当の苦難を伴ったことであろう。詳しい資料を求めることは不可能に近いが、このような推測がなりたつのである。イタリアを出発するに際しては、彼の道中出来る限りの厚意を与えてくれるようにとイギリス商人たちに対する丁寧な紹介状を得ている。パリを南東へ Piemont (Piemont *Sonnet XVIII* をみよ) を通って、Nice に辿りつき、そこで船を利用して Genoa に着き Leghorn, Pisa, Florence へと旅を続けた。特に、Florence はロンドンに比較すれば都市の構造も異なり遠く背後に丘陵が並び立つその町の様子には興味を抱いていたために2ヶ月滞在したと云っている。一般大衆の真中には飛びこまずその名士たちとのみ会い従って文学の集会には顔を出していた。彼は ‘diffusion of knowledge’ 或は ‘Preservation of friendship’ と呼んでその集会の雰囲気を楽しんだ。その当時では、ルネッサンスの色調が濃厚に残存し、フローレンス語が最も純粋な形で保存され話されていた。またその人たちは何れかの学会に属していた。Jacob Gaddi, Carolo Dati, Frescobaldo, Coltellino, Bonomatthei, Clementillo, Francini などは、いついかなる時でもミルトンの思い出に残る人たちだと名前を列記している。なおその後 ‘and many others’ と書いているにいたっては、はたして friendship というに値するかどうか。friendship とは何か、その意味内容に一応疑いをはさみたくもなるであろう。

Florence から Siena, それから後で回想して自由なるとか、地上の女皇とか呼んだ Rome へと足を延ばした。そして有名な都の古蹟見物に約2ヶ月を費し、そこで Lucus Holstein (1596—1661) から親愛の情のこもった心で注目を受けた。学者たちとの会見も行われた。ローマから同行した隠遁僧 John Baptista Manso (1561—164?) を紹介された。ミルトンによればこの人も ‘a noble of distinguished rank and authority’ で、その人へ Torquato Tasso (1544—95, Italian poet) が友情に関する書物を献じたという。マンソーはミルトンを都市および総督の邸宅へ案内し、また一度ならずミルトンの宿舎を訪れたとある。これは友情を示すものだとしてミルトンは喜んだのであった。敷衍すれば、ミルトンの出発に際して十分な歓待が出来なかったを謝り、というのもミルトンが宗教問題について殆んど忌憚なく話したものだ。マンソーとしては十分論議が尽されなかったことをその理由に挙げ

ている。元来友人を多く持っていたマンソーは愛と美などの哲学的対話、タッソの1619年の生活、St. Patricia に就いての書物を出版していた。そういうことで2人には論戦の花が咲いたらしい。

ミルトンがシシリィとギリシャへ行こうとしていた時も時、イギリスでの騒動 (The First Bishop's War) の勃発を聞いて、

“I thought it base to be travelling for amusement abroad, while my fellow citizens were fighting for liberty at home.”

と、愛国者の血がたぎり、帰心矢の如き精神状態となった。まさしく自分がイギリスを背負っている国士の心理状態に追いこまれていた。早速引き帰している途中、イギリスの Jesuits たちがローマへ引き返したミルトンに危害を加える陰謀がたくまれていることを商人たちから知らされた。その原因はイタリアで彼が宗教問題について自由に、卒直に論議したからであった。すでにイギリスの商人たちに近かずにいたのは、商人とは最も早く情報を運び得る人たちで、従って彼はこのことの起りうる可能性を知っていた筈であつたろうと思う。それにもかかわらずローマへ行って約2ヶ月前と同じように法皇の首府において宗教の改革を堂々と弁護した。また Florence へ引き返すと恰も故国に帰ったように異常なほどに愛情をもって迎えられた。そこに以前滞在したと同じくらいの日数足を止めたのであった。それから Appennines 山脈を横断し Bologna を経て Venice へ達した。また1ヶ月余り観光に費して、イタリアですでに買い集めた書籍を般便で本国へ送り出し Verona と Milan を通過し Leman 湖に沿うて Geneva に到した。その場所とは、

“In all those places in which vice meets with so little discouragement and is practised with so little shame”

であって、彼は virtue の道からは逸れることはなかったと *The Second Defence* のなかで述べている。

Geneva では神学教授 John Deodati と論議したことを快く思っていた。フランスを通り故国へ帰った。往復とも徒歩に始終し1年3ヶ月を費しての長い旅であった。我々の想像以上の疲労は体内に蓄積されたに違いない。この旅行中でミルトンの感銘の最も深かった人物の1人は Manso (1561—164?) であったであろう。マンソーは実に彼に対しては親切の限りを尽したとミルトンは言っているが、殊に別れの挨拶には大なる満足と恐懼を心の底まで感じたのである。*Mansus* のなかには、Manso とか、Fortunate old man, Old man beloved by the gods で呼びかけられ、またギリシャ・ローマの神話、Chaucer の敢行したイタリア旅行、Spenser, Shakespeare への言及、神々に対する努力、純潔な心、熱意ある virtue を挿入しながら、最後の句に「私は喜んで天上のオリンパスで私は祝福されていることを知ろう。」と結んでいる。だが次に出てくるのはガリレイとの出会いの問題だが *Areopagitica* (1644) においては、

“There it was that I found and visited the famous Galelio, grown old, a prison to the inquisition, for thinking in astronomy otherwise then the Franciscan and Dominican licensers thought. And though I knew that England then was groaning loudest under the prelatial yoke, nevertheless I took it as a pledge of future happiness, that other nations were so pesuaded of his Liberty”¹⁵⁾

と極めて簡単に述べているが、牢獄に幽閉されていたガリレイがミルトンに気安く会ってくれたかどうか疑問視する批評家もあるが、紹介状を巧みに利用する人間ミルトンの一面

をイタリアの旅でみた我々としては不可能であると断言することもあるまい。たとえ、会うことが出来ずしても、人間の理性が自由に用いるということが、宗教上の頑固さによって押しつぶされるという象徴として、ミルトンの心のなかに残っていたことがわかると Potter は云っている。つまり、カトリシズムに対する敵意よりもガリレイに対する友情の方が強かったということの方が妥当であったであろうというのが当時のミルトンの心理を分析するに適していたと云わねばならないだろう。

……as when by night the glass
Of Galileo, less assured, observes
Imagined lands and regions in the moon ; (P. L. V. 261—3)

とか

……There lands the Fiend, a spot like which perhaps
Artronomer in the sun's lucent orb
Through his plazed optic tube yet never saw. (P. L. III. 588—90)

と詠んだ上記の資料から思考して、月面と太陽の点をガリレイの遠望鏡（オランダ製の改良品だが）を通してその月の状況と宇宙の神秘性にうたれて、神の宇宙であるその稜序を感得した彼のイタリアにおける科学から神性への体験は「失樂園」や「復樂園」へと結びつくのである。

再び、太陽についてであるが、21才の時にミルトンは、太陽とは道徳的光と栄光神のものであるとか、九つの球から発する音楽を考えていたということから、イタリアにおけるガリレイの望遠鏡から眺めた天体の神秘はミルトンには我々の想像をこえた興味があったことであろう。それについてミルトンは云う。

“But if we possessed hearts so pure, so spotless, so snowy, as once upon a time Pythagoras had, then indeed would our ears be made to resound and to be completely filled with that most delicious music of the revolving stars ; and then all things would return immediately as it were to that golden age ; then, at length, freed from miseries we would spend our time in peace, blessed and envied even by the gods.”

と天体と音楽にふれて言及している。

ミルトンは科学に定義らしい定義を下したというわけではないが、次のような

“O sacred, wise, and wisdom-giving plant,
Mother of science, now I feel thy power
Within me clear, not only to discern
Things in their causes, but to trace the ways
Of highest agents, deemed however wise.” (P. L. IX. 679—83)

のなかで、科学とは ‘knowledge’ という単なる意味を付与しているが、全著作——散文と詩——において分析すると、‘knowledge’ であることに誤りはないが、アリストテレスの宇宙観、天文学、生理学、倫理学、またコペルの理論——宇宙組織、天の無限、天体の軌道の順序——などからの影響は十分に受けている、つまり哲学的構想から百科辞典式なる科学全般の思想を組み立てていったのである。

再び言及したいが、ミルトンの著作は、悪くいえば中世紀およびルネッサンス時代の知識の手帳と科学百科事典のなかに見られるように彼の時代の科学を背景としてミルトンの

作品は成立しているのであると云っても過言ではなからう。しかし、ベーコンとガリレイの両人は17世紀の学識ある人びとにとって注目の的であると云ったが、これも全く同じような程度においての2人ではなく、またベーコンとミルトンの間にも同一性はなかった。例をとれば、宗教、政治について簡単化すれば、ベーコンは当時のイギリス国教の監督政治を沈静し、且つ強化する改革を提案したのに対して、ミルトンは監督政治を破壊し、聖書と自由に対する愛を調和し教会政治を樹立しようとするには改革への接近は否定し得ないであろう差異なのである。

また詩形としても自由性の許される無韻詩を使用し、十四行詩も Surrey—Shakespeare をさけてイタリア十四行詩（やや工夫をこらしているが）、主題の範囲を拡大し、ライムを変化して彼独自のものとした。彼がイタリア旅行前に書いた、眼に訴える完璧な構造体と称すべき *Lycidas* (1637)¹⁸⁾ は ‘the great pastoral elegie’ で、彼はイタリアへ行く準備の意志をもって書かれたものであろうと推察される。

マンソーを宗教との関係においてみると、ガリレイは科学との関係においてみる事が出来る。ところで散文の *The Second Defence* には、イタリアの固有名詞が出てくるが、「失樂園」のなかでのイタリアとの関連性はどのようになっているだろうか。詩人の心的発展がみられることは確かであろう。俗に云う消化作用が活発におこなわれている。第三期の作品のなかでは、P. L. I. 287—89, P. L. III. 538—90, P. L. VII. 366—9, P. L. VII. 376—84, P. L. VII. 579—81, P. L. V. 201—4 など詩人たる想像力の旺盛な流動が感じられるのである。またイタリア旅行から得たガリレイの実名と天文学に関する詩齣があるが、*Tuscan artist* と名が変わりガリレイの名前は完全に消え去っており、「復樂園」四巻 40—2 において、

“By what strange parallax or optic skill
Of vision multiplied through air, or glass
Of telescope, were curious to inquire”

は詩の中に完全に消化されているものの、telescope が現われているのは、全盲のミルトンが不注意か偶然かいずれか知らないが、彼の想像力が「失樂園」の時に比較すれば、弱体化してそのまま telescope を思いつかせたのか、それともいかにその望遠鏡に対して懐旧の情を押え得なかったのか判断に苦しむが、散文と比較してみると、詩心に相当の差異があるのに気づくであろう。

また音楽にかえるが、彼が詩の形式に大いに寄与したのは、古今にわたるイギリスでの音楽、イタリアでの音楽であって、イタリアにおいて、彼は芸術特に音楽がどのように文学に結びつき得る可能性があるかどうかを試みてみたく、また音楽理論を思い浮かべながら、あらゆる種類の楽器、あるいは声を通して彼自身の思想を表現する可能性を試みてみたのである。というのは、人間の声は神の顕示ともなり、詩を形成する言語はこの音楽によって左右されるということも知り得たのである。ギリシア劇とそのなかのコーラスの使用のことについては、結局予定していたギリシア旅行を断念せざるを得なかった事実から考えると、このことはイタリアで専門家から聞いたのであろうか、*Samson Agonists* は読む劇としての劇になったが、彼の持っていた音楽性、音楽理論、それに伴う詩語の選択力、ギリシア古典文学の知識、見たと思われるガリレイの盲目の姿が混合した結果の一部とみることもできよう。

ミルトンのイタリア旅行はその後、どのような文学的生涯に寄与したか。近代の批評家

たちは多少の差はあっても低い評価を与えることはなく、むしろその影響は大なりとの評価に傾いているだろう。前述したのだが、盲目にならずにイタリアの旅ができたが、旅行中に余りにも詩人としては世俗的な一面を覗けるけれども、一見耳学問的な節はなくもないが、体験は外延的でかつ深遠であったことは生涯の発展と人間成長には大いなる寄与であり、イギリス民族と他民族との間の伝統の差異を見ることができ、模倣といわれる一部の批評から逃れて予想外に思索的になり、イタリアでの書物の蒐集はこの詩人の大きな力となり、帰国後書物について、

“A good book is the precious life-blood of a master-spirit, embalmed and treasured up on purpose to a life beyond life”¹⁹⁾

と同想せしめたほどの教訓となっている。いろいろと考えてみると、ミルトンは人間であることを十分に知り得たという一語に尽きるであろうし、また旅行中詩人としては想像の休止の状態と考えられるかもしれないが、次の散文時代とともに想像が心の奥深く古典と同時代の作家の作品を材料として徐々に醸造され、ソネットと合一して第三期の大作へと進展していくのである。

参 考 文 献

1. Harold Bloom, *The Anxiety of Influence*, Oxford University Press, 1973
2. Hanford, *A Milton Handbook*, F.S. Crofts & Co., New York. p.401-3
3. Lewis Einstein, *The Italian Renaissance in England*, Burt Franklin N.Y. p.146-7
4. S. ドレスデン 著, 高田勇訳「ルネサンス精神史」平凡社 58頁-59頁
5. Bloom, *The Anxiety of Influence*, p.5
6. Hanford, *A Milton Handbook* p.404
7. Lois Potter, *A Preface to Milton*, Longman 1971 p.159
8. *The Student Milton, The Secound Defence* p.1146
9. Sigmund Spaeth, *Milton's Knowledge of Music*, Ann Arbor. p.2-23
10. Hanford, *A Milton Handbook* p.408
11. James Thorpe (ed.) *Milton Criticism, Selections from Four Centuries*, Samuel Johnson, *Milton* p.86-7
12. Robert Bridges, *Milton's Prosody*, Oxford p.10
13. Sumners, *The Lyric and Dramatic Milton*, Columbia University Press. 1965 p.365
14. Louis Potter, *A Preface to Milton*, p.13
 “France, which he passed through on his way, held little interest for him; like many of his contemporaries.”
15. *The Student's Milton*, p.745
16. Lois Potter, *A Preface to Milton* p.14
17. *The Student's Milton, Prolusions* p.1104
18. *Lycidas* は Sicilian poets の創造するところで、Virgil によって受けつがれた。イギリスの最も有名なものは、この *Lycidas* の外に、Shelley の *Adonais*, Arnold の *Thyrsis* である。ミルトンは英語で書いたものよりは劣っていたと考えたに違いない。この時に、彼の心のなかには2つの全く違った衝動があったが、彼は実に詩心の調和をなしとげた。
19. *The Student's Milton, Areopagitica* p.733